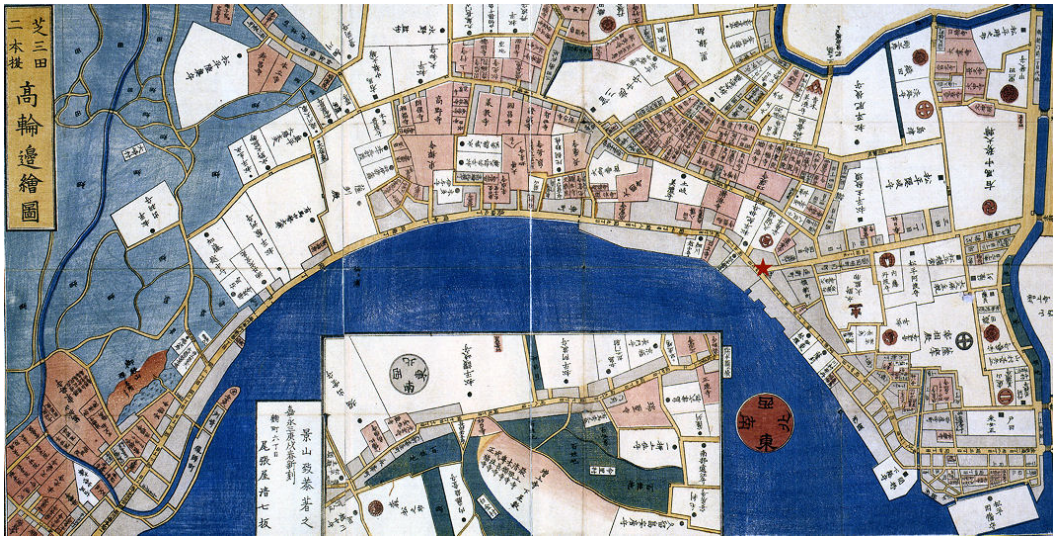
芝浦水再生センター界隈の今昔

ここに二冊の本があります。「写された港区二（高輪地区編）」（港区教育委員会編）と、「セピア色の品川」（北品川二丁目町会編）です。ともにそれぞれの地域を撮影した古い写真を収集し、これに解説を付け加えたものです。今回の職場界隈探訪は、これらの本をガイドとして、芝浦水再生センター（港区港南、品川駅から徒歩五分）のある品川・高輪界隈の今昔を訪ねてみることにしました。

探訪ルートは、品川駅→旧東海道→旧品川浦→旧海岸通→芝浦水再生センター→札の辻→田町駅としました。

江戸切絵図

この界隈の江戸時代末の絵図です。切絵図とは江戸の町をいくつかの地域に分割して編纂した区分図のことです。折りたたむと新書本くらいの大きさになり、実際に町を歩きながら見るのに便利なものでした。品川駅や田町駅や芝浦水再生センターのある辺りは、まだ海（芝浦・高輪海岸）の中です。これらの海岸は、汐干狩など江戸庶民の行楽地として賑い、陰暦の正月と七月の二十六日の夜半に、海上に月が浮かぶのを待って拝む「二十六夜待ち」という行事が、明治の中頃まで行われていました。



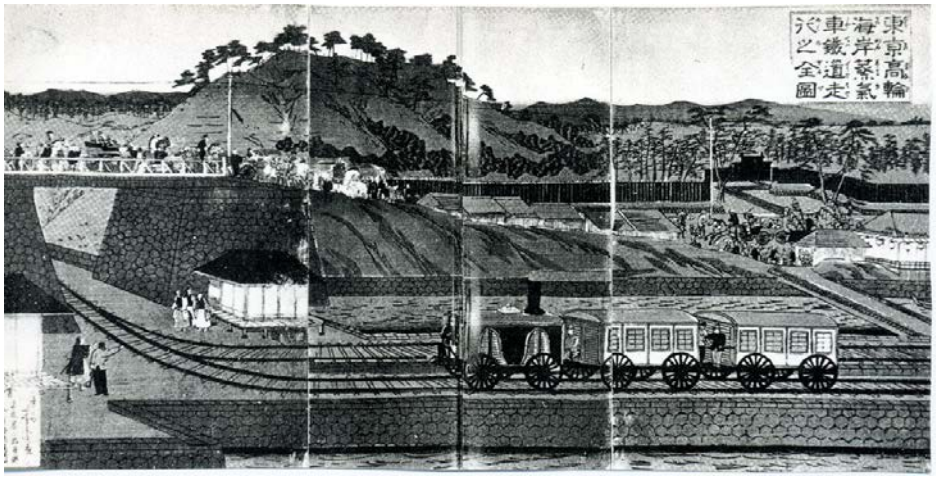
▲　江戸切絵図

品川駅辺りの旧東海道は波打ち際に沿っています。街道沿いの高台には武家屋敷や寺院が並んでいました。赤穂浪士の討ち入りで有名な泉岳寺もこの界隈にあります。

品川駅

巌谷大四は、「文学のある東京風景」の中で品川駅について、このように述べています。

『私は品川駅の前の長い坂のつきあたり、高輪南町に生まれ、大学時代までいたので、このあたりは、下世話な言葉で言えば縄張りであった。子供の頃は、品川駅も裏がもう海で、坂の上から蒼海原が見え、汽船などが通るのも眺められた。その頃、よく八ツ山橋の上まで遊びに行き、橋の上から、下を通る汽車や電車をながめるのが楽しみだった。蒸気機関車が黒煙を吐いて、それが橋をひととき覆ってしまう。そんな中にわざと立っていて、平気でその煙を吸



▲　浮世絵に描かれた品川駅と八ツ山橋（明治四年）

▲　高輪八月十五夜一景（明治五年）

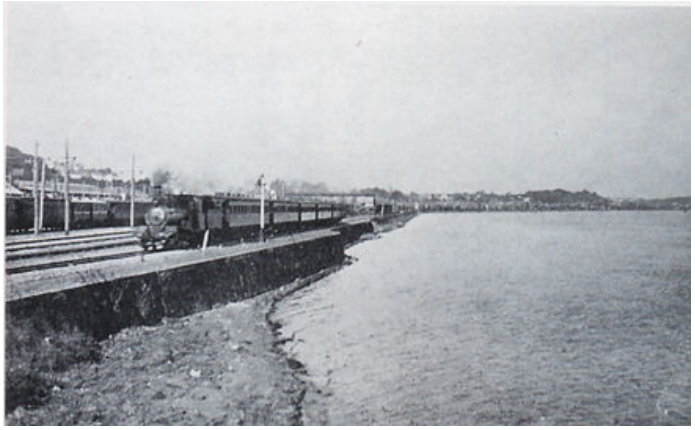
いこんだり、今考えると無茶なことをしたものだ。』

品川駅は、新橋駅より四ヶ月早い明治五年五月に仮開業しており、東京都内で最も古い駅です。西洋造り平屋建で現在のところより、やや大井町寄りに位置していました。当時の浮世絵をみると、線路は海を埋め立てて築いた土手の上に敷設されており、駅舎とホームとの間にはまだ海が残っていて橋で結ばれていたことがわかります。土手にあたって砕ける海水の飛まつで、ホームに停まった客車は窓を全部閉めなければならなかったといいます。

ところで、品川駅の所在地は品川区ではなく港区です。これはその頃、この地域で一番賑わっていた品川宿の人たちが自分たちの街の近くに鉄道の駅ができるのを嫌ったからです。

もう一枚、品川駅前から八ツ山方面をみて描いた絵があります。画家は山本松谷、明治三十五年頃のものです。画面右奥の高台が八ツ山です。

手前の倒れている自転車の先にみえる鉄路は京浜電気鉄道で、その駅舎（高輪停留場）は今の京浜ホテルのところにありました。その左に幟を立てて列をつくっているのは、チンドン屋さんです。日の丸をつけた陣笠をかぶり、先頭の一人が拍子木を打ち鳴らして進んでいます。この頃すでに、太鼓やラッパを揃えた洋風の楽隊が商店の開業や売りだしを宣伝していましたが、このような和風のものもまだあったのです。



▲　品川停車場（明治四十四年）

▲　八ツ山付近の景（明治三十五年頃）

画面左手の道が旧東海道です。屋根の上に飾りを置いた建物は、品川駅だと思われます。

旧品川宿

八ツ山橋を渡ると、旧東海道の入り口がみえます。次の写真は、昭和六年頃、撮影されたものです。砂利道の脇に、「ソーダ水」の看板がみえます。今ではほとんどその面影を残していませんが、私たちもパチリ。

この写真の右端の記念碑に刻されている問答河岸とは、かつてこの道のすぐ横にあった荷揚げ場の名前です。三代将軍徳川家光がこの近くの東海寺を訪れたとき、住職の沢庵和尚がこの辺りまで出迎えに来てこんな問答をしたといいます。

『家光が「海近くにして東（遠）海寺とはこれいかに」と。沢庵はすかさず「大軍のみを率いても将（小）軍というがごとし」。』

今でもこの辺りの道幅は江戸時代そのままです。

西国に向けて江戸の日本橋を旅立っ

▲　昭和初年の旧東海道

▲　現在の旧東海道

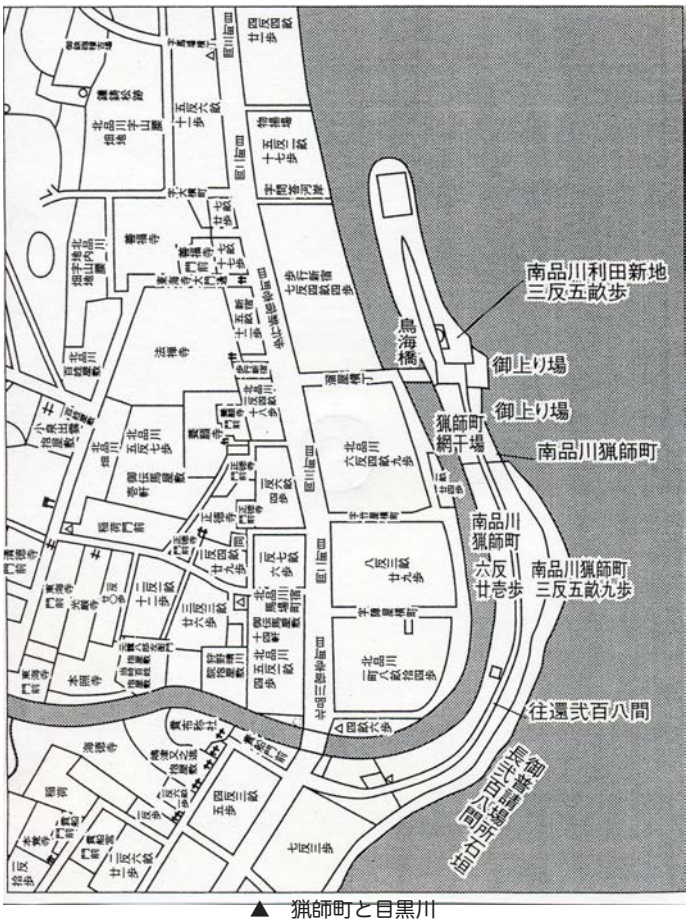
た人々は、まず第一の宿駅であるこの品川を通ります。品川浦と相俟って陸海両路の玄関口でした。宿駅というよりは、むしろ社交の場としてたいへん賑ったところです。

食売旅篭屋（九十二軒）、平旅篭屋（十九軒）、水茶屋（六十四軒）、煮売渡世（四十四軒）、餅菓子屋（十六軒）、蕎麦屋（九軒）などのほかに、酒屋、たばこ屋、すし屋、小間物屋などの商店が建ち並び、家屋数千六百軒、七千人が住んでいました。

▲　昔ながらの店先

旧品川浦

品川宿は目黒川を挟んで北と南に分かれていましたが、この川は海岸の手前で砂洲に阻まれて直角に左折し海岸線と平行して流れていました。海中に半島のように横たわる細長い地区は、以前洲崎と呼ばれていました。その後猟師町と称し、もっぱら漁業を生業としていたところです。徳川将軍家に魚介類を献納する御菜肴（おさいさかな）八ヵ浦（本芝、金杉、品川、大井御林、羽田―以上東京都―、生麦、新宿、神奈川―以上横浜市―）の一つとして発展していきました。



▲　猟師町と目黒川

また、浅草海苔の名前で知られる海苔は、江戸中期から末期にかけては、この品川浦が主要な産地でした。ひび粗朶を立てる養殖法はここで確立され、次第に大井、大森、羽田へと広がっていきました。

大正橋は、品川宿と猟師町を結んでいた橋で、大正時代に造られたものです。川の両岸に繋留されているのは、海苔舟でしょうか、それとも釣り舟でしょうか。

▲　雨の大正橋（昭和６年　川瀬巴水画）

御殿山下台場（砲台）跡

今をさかのぼる百五十年ほど前の幕末、江戸前の海に大きな変化が起きました。それまで物資を輸送する荷船と漁船とが行き交っていた品川沖に、大砲を備えた五つの人工島が築かれたのです。ペリーの黒船来航を受けての措置でした。この他、ここ猟師町の突端の海岸にも陸続きで五角形の砲台が造られ、三門の大砲が据えられました。これが御殿山下台場です。明治になって外周は埋め立てられてしまいましたが、台場の輪郭は道路として残り、今でもその位置と形を知ることができます。跡地には台場小学校が建っています。

目黒川の改修

旧東海道が目黒川を渡るところ（品川橋）に荏原神社という古社がありますが、ここの鳥居は目黒川に向いていてその先に、朱塗りの人道橋（鎮守橋）がわざわざ架けられています。さらに不思議なことに、この神社の住居表示は北品川であるのに、橋を渡った先の南品川の総鎮守なのです。

実は、大正十五年～昭和六年に行われた砂洲を開削して目黒川を直線化する改修工事により、それまで神社の北を湾曲して流れていた川が南側を通るようになったからなのです。さきほど述べた大正橋が架かっていた旧河道は、分流となり船溜まりとして使われるようになりましたが、昭和三十年代に汚れがひどくなりごみ捨て場と化し、四十一年頃一部が埋め立てられ道路となりました。

しかし、旧河口付近はかろうじて水面が残され、今でも釣り船や屋形船がびっしりと舫っています。

▲　旧河口の船溜り

海苔を乾す風景（昭和二十八年）

芝浦第三号埋立地

芝浦水再生センターは、芝浦第三号埋立地（大正十二年から埋立てを開始、昭和四年に完了し、その後高浜町と命名）と呼ばれていた一画に、昭和三年に造られた芝浦ポンプ所に始まります。当初は下水の仮処分を目的にしていたので、沈殿池が二つ、汚泥槽が一つあるだけでした。さらに、これを処理場に拡張する工事が継続して行われましたが、この頃の航空写真です。画面中央から上部にかけての一帯が処理施設の工事現場だと思われます。画面の右上部が高浜運河で、左手前には品川駅の広い構内がみえ、水面とおぼしいところが残っています。運河が構内まで入り込んでいたのでしょう。

「芝区史」は、

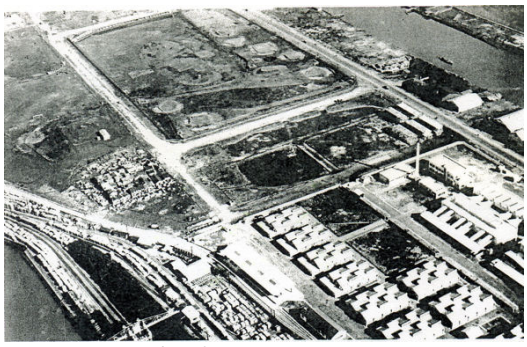
『人家の乏しい高浜町の夜は森閑とした闇の一色に閉され、ここに佇めば都の空の遠灯り、品川の花街に燃えるネオンの色、海上に明滅する燈台の灯、波止場に響く汽笛の音が、またとなく情調的なものに感ぜられる。』

と記しています。

また、歌人の土岐善麿は、このように詠っています。

品川の沖ゆく汽船の笛ならし
星空すずしく今宵きこゆる

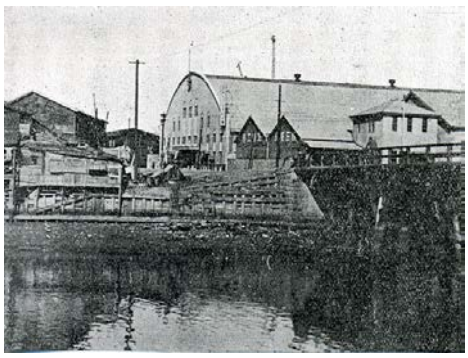
お台場の緑あかるくさざなみに
浮べる見ればものおもひもなし



▲　芝浦ポンプ所の航空写真（昭和初年）

芝浦水再生センターの正門近くの高浜西運河に架かる高浜橋は、芝浦第三号埋立地造成に伴い架けられたものです。画面の右上のドーム型屋根の建物は、この当時東京で最大の規模を誇ったスケート場です。

本館の前から周囲を見回すと、高層のビ



▲　高浜橋附近（昭和十三年）

ル群がぐるりとセンターを取り囲んでいます。旧東海道沿いの高台は言うに及ばず、埋立地にも。そして、新幹線の品川駅の開設により駅舎もがらりと変身しました。あのうす暗くてじめじめした長い地下道もなくなりました。そんな中で今でも健在な第二沈殿池のサイフォン式採泥機のゆったりとした動きに、なんとも言えない郷愁をおぼえました。

▲　芝浦の月 大正初期 山本昇雲

高浜運河からのぞむ芝浦水再生センターの本館

札の辻

芝浦水再生センターの前の旧海岸通りの高浜橋を渡ってしばらく行き左折すると、ＪＲの線路を越える札之辻橋に出ます。橋を渡り終えると、そこはもう第一京浜道路（国道十五号線）の札の辻の交差点です。真っ直ぐ行くと赤羽橋・増上寺・飯倉・虎ノ門方面へ（桜田通、国道一号線）また、右折すると金杉橋・銀座・日本橋方面へ（こちらが旧東海道のルート）。この交差点には江戸時代初期、高札場がありました。高札とは幕府が法令を一般に知らせるために設けた掲示板のことです。

▲　札の辻から第一京浜を望む

（文責　地田）

参考資料（文中で明記したものを除く）

「百年前の東京絵図」　山本駿次郎編　小学館

「しながわノスタルジー写真館」　東京商工会議所品川支部

「品川区史跡散歩」　学生社

「品川区の歴史」　名著出版

「港区史跡散歩」　学生社

「港区の歴史」　名著出版

探訪余話

今回は、はからずも昔の海岸線を辿るルートとなりました。　そこで、「さまよえる埋立地―江戸ＴＯＫＹＯ湾岸風景史―」（石川雄一郎著、農山漁村文化協会）より、芝浦・高輪海岸埋立に関する一節を紹介し、探訪余話とします。

『江戸の湾岸はデルタ地帯の浅海で、深いところといえば、流入する隅田川の澪筋くらいだった。それも上流から運ばれる土砂ですぐ埋まるため、小型船の出入りにも支障をきたす。江戸湊を東京港に脱皮させるには、まず澪筋の浚渫が急務だった。東京府が隅田川の永代橋下から、沖合の台場へとつづく澪筋をさらいはじめたのは明治二十年。内湾が東京港として変貌をとげる、築港工事の第一歩といえる。……　澪筋は浚渫したものの、隅田川が吐く土砂はたえまなく、しだいに水底は浅くなる。ついには、わずか百トン級の船しか入港できないほど港の機能が低下。東京市は明治三十九年から大正六年にかけて、再び澪筋の浚渫とともに船舶の泊地や航路の拡張など、河口の改良工事にのりだす。このときの浚渫土砂はほとんどが芝浦一帯の海辺に投入され、ザッと三十七万坪の埋立地が造成された。……　震災後に再開された河口改良工事は、五千トン級の船舶が入港できる水域と港湾施設の確保に邁進する。昭和十年に工事が完了したあと、さらに八十三万坪の埋立地が内湾をおおった。……』